

<補足資料>

■ ルードウ・ドー・アマー：権力に対して真実を語って

Ludu Daw Amar: Speaking Truth to Power

ミン・ジン

2002年10月

The Irrawaddy (『イラワジ川』), Volume. 10 Number. 8

ビルマの最もよく知られた女性ジャーナリストで社会批評家であるルードウ・ドー・アマーの人生を概観してみたい。アマーというビルマ語は「強さ」(the strong) または「固さ」(the hard) と訳すことができる。これはビルマの最も尊敬を受けている女性の一人であり、11月で87歳を迎えるルードウ・ドー・アマー (Ludu Daw Amar/彼女はAmahと表記することを好む) にふさわしい言葉だ。大衆に対して/大衆のためにメッセージを発する能力をもった精神的な政治的反对者で左翼ジャーナリストであるルードウ・ドー・アマーとその家族たちは、当局との間であまりにも多くのトラブルを抱えてきた。ドー・アマーは現在も継続的な監視下に置かれているが、彼女は権力に屈することは決してなかった。ルードウ (人民) という敬称が示唆するように、ドー・アマーの存在意義は、人民の代わりに権力に対して妥協することなく真実を語ることにある。

「私はその第一印象を決して忘れないでしょう」-1995年以来ドー・アマーに四回面会したオランダ人ジャーナリスト、ミンカ・ネイハイスはその思い出を次のように語っている。「最初、彼女はとても痩せて見え、彼女の腕には腕時計が重過ぎるのではないかとさえ思われた。しかし、彼女がしゃべりだすと、その印象はすぐに消えうせた」。彼女のゆるぎないコミットメントと強さについてコメントを求めると、ドー・アマーは『The Irrawaddy』(『イラワジ川』) に対して次のように語った。「私は簡単にはあきらめません。しかも、不正義に寛容ではられないのです。これが私の考え方なのです」。

彼女の伝記にある幼少期の逸話は、この強い精神のルーツを明らかにし、しばしば見過ごされてきた彼女の謙虚な一面をも示している。「母は私たちがむち打つとき、『泣くのはおやめ』と言うのです。きょうだいたちは私を除いて皆泣くのをやめました。私は痛かったので泣きました。しかし、泣けば泣くほど、私はむちで打たれたのです。母はどうやって私に痛みを感じさせなくしたのでしょうか。実際、それは断固としたものでした。母と私の我慢比べとなったのです」。このタフな性格は、彼女が1936年にラングーン大学に入学した後、彼女をまず政治に引き寄せることになった。

イギリスに対する独立運動の期間、彼女はその勇気と美貌を日刊新聞に賞賛され、1938年にはすでにビルマの文学界に彼女の最初でかつ後世に残る印を刻印することになった。国立学校の学長で後に1947年にビルマの独立のヒーローであるアウン・サンと共に暗殺されたウー・ラザクは、ドー・アマーにモーリス・コリスの書物『ビルマでの試練』(Trial in

Burma) をビルマ語に訳すことを提案した。出版者は、月刊の青年向け雑誌『Kyipwa Yay』(進歩青年) を発行し、ラングーンで出版社を運営していたウー・ラであった。翌年にドー・アマーの夫となったウー・ラの援助を受け、翻訳はたちまち成功し、二ヶ月間で初版の3000部が売り切れとなり、すぐさまその倍の数が増刷されることになった。

ウー・ラが妻とともにマンダレーに移住すると、ドー・アマーの文学活動はより活発となった。その作品のほとんどは英語の小説の翻訳だったが、彼女の真の情熱はジャーナリズムにあった。第二次世界大戦の終結後、ウー・ラは、ドー・アマーを編集助手として、隔週刊の雑誌『ルードゥ』(人民) を発刊した。1946年には二人は『ルードゥ・デイリー・ニュース』を発刊した。その政治的論評と分析は植民地支配反対の熱望と闘争のための重要な声となった。そこから、ドー・アマーはルードゥ・ドー・アマーという名前を得ることになった。しかし、ビルマが1948年に独立を達成したそのわずか一年後、マンダレーのルードゥ出版社は爆弾で瓦礫の山となった。

「当時、マンダレーではよく政権が変わった」ドー・アマーはそう説明する。「軍部はルードゥ紙を共産主義者に共感を寄せているとみなしており、そこで政府軍は建物を爆破したのです。彼らは彼女の家を取り囲み、子どもたちと二人の妊婦を含む、家にいたすべての者を強制的に外に連れ出した。その後、兵士たちは銃を構えた。「午前中のことでした。彼らは私たちにマシンガンの照準を合わせ、私たちを皆殺しにすると脅しました」とドー・アマーは当時を思い出して語っている。勇敢にも彼女は決然として立ち上がり、兵士たちに説明を要求した。地域の僧侶たちやその他の人々が彼女たちの釈放を懇願し、軍隊は何の危害も加えずに立ち去った。

独立に続いて発生した内戦は急速に強まり、権力の蛮行も激しくなった。『ルードゥ』は新しい事務所で再刊されることになり、ドー・アマーも不正義に対する活発な反対を再開した。国内の平和を呼びかけ、世界の出来事を分析する彼女の記事は、とりわけ進歩的な青年たちに歓迎された。50代の作家ニィ・セー・ミンは「国際政治についてのドー・アマーの確固とした分析は、私たちの目と耳を開かせた。彼女の政治的見解は私たちの賞賛を得た」と当時を思い出して語っている。

1953年、コペンハーゲンでの世界民主女性会議、ブダペストでの世界平和会議、ブカレストでの世界青年祭典に参加することで、彼女の政治活動は国際舞台にのぼることになった。同じ年、五人目の子どもが生まれた直後、彼女の夫が政府によって拘束され、三年半にわたって投獄されることになった。今ではドー・アマーの編集責任は倍化することになり、子どもたちを叔母に預けざるを得なくなった。

子どもたちを直接に元気づけることはできなかったが、ドー・アマーは彼らの生活になんとか影響を与えようとした。彼女が子どもたちに与えた推薦図書のリストには、『チャップリン自伝』、『ローマ帝国衰亡史』、そして国際的な環境意識を高めた独創的な作品である『沈黙の春』があった。彼女はその他にも Thakin Kodawhmaing の作品のようなビルマ古典や Khitsan の革新(20世紀前半のビルマ文学の現代化)をもあげていた。

「母は『こうしなければならない』とか『そうしてはならない』とはめったに言いませんでしたが、自分の行動でそれを示しました」とドー・アマーの次男ポー・タン・ジャウンは語る。「三人の兄弟の誰も酒も飲まず、タバコも吸いません。しかしそれは両親がそうするなど言ったからではなく、自分たちの行動によってそれらが良くないものであること

を私たちに納得させたのです」。

1950年代後半までに、彼女の長男ソー・ウィンは母の範に習い学生会で政治活動を活発におこなうようになり、1963年にはビルマ共産党 (CPB) とともに武装闘争に加わるために地下に潜行した。その後ポー・タン・ジャウンが政治活動を理由にマンダレー大学を退学処分になると、軍事政権はそれぞれがみな破壊活動分子である疑いがあるとして家族全員を標的にするようになった。ドー・アマーは当然にも自分の息子たちの生活が危険にさらされることを心配するようになったが、悔やんだりはしなかった。違法な政治活動への関与を理由に1966年に懲役6年の刑を受けて下獄したポー・タン・ジャウンは、「両親は私たちの信念に決して異議を唱えなかった。政府のエージェントのことを耳にすると、気をつけるように言うだけだった」と言っている。

1967年、政府はルードウ紙を発行禁止にした。ポー・タン・ジャウンが投獄されているあいだに、ソー・ウィンはCPBの粛清によってジャングルのなかで殺された。多数の死者を出したこの粛清は、軍によってCPBとそのシンパに対する最も強力なプロパガンダ攻撃として利用された。ポー・タン・ジャウンは釈放された後、ソー・ウィンに何が起こったのかを説明し、その粛清を謝罪するドー・アマー宛ての手紙をCPBのある指導者から受け取った。「私が母にその手紙を手渡すと、彼女の目から涙がこぼれ落ちた。母は私に『お父さんと私はこのことについては話さなかった。何も起こっていないふりをしていただけ』と言った」と彼は語った。数年後、ポー・タン・ジャウンは兄の歩みを追ってCPBに参加した。軍はそれに応じて1978年に彼の両親と弟のコー・ニェイン・チャンを逮捕したが、ドー・アマーの反抗精神は揺らぐことがなかった。

一家の政治的激動のなかでも、ドー・アマーは作家Thakin Kodawhmaing、漫画家シェ・ヨーとバー・カレー、パフォーマンス・アーティストのシェ・マン・ティン・マウンその他の人物の経歴の調査に多くの時間を捧げ、賞を受賞し今では現代の古典とされている『人民が愛する芸術家』など多くの文学作品を生み出した。彼女はまた、『ビルマの非演劇的パフォーマンス (Anyien)』や『現代演劇 (Thabin)』、その他にも文化的アイデンティティーの問題に焦点をあてたビルマの古典音楽や絵画についての作品などを書いた。

しかし、ドー・アマーは単なるノスタルジックな伝統主義者ではなかった。彼女は料理を楽しみ、花や田舎の市場に愛着をもっていたが、ハリウッド映画やディズニーのアニメも好んだ。そして、ビルマの歴史的文化財の業績をあげることが彼女の著作のすべてではなく、彼女は現代ビルマ文学とそれ以前とを分かち革新的な話法の先駆者でもあった。彼女はまた、性教育を唱導し、現代ビルマ社会における女性の不払い労働の貢献について声を上げて告発する点での開拓者でもあった。

ルードウ・ウー・ラは1982年に亡くなったが、ドー・アマーは孤独な寡婦として取り残されはしなかった。友人や称賛者が彼女の揺るぎない高潔さと人を鼓舞する著作のまわりに集まった。1985年の70歳の誕生日からは、国中の作家や支援者が毎年マンダレーに集まり彼女に敬意を払うことになった。

ドー・アマーの人気にもかかわらずあるいはむしろそのために彼女の家族は打ち続く政治的苦境に耐えてこなければならなかった。ニー・プー・レーというペンネームで著名な短編作家であるコー・ニェイン・チャンは政府に逮捕され、10年の懲役刑を受けた。彼は違法団体との接触の容疑で逮捕されたのだが、多くの人々は彼の家族の政治的血統と

彼の風刺作品が拘束の理由だと信じている。

1944年以来、ドー・アマーの著作はコミュニティの結束の崩壊、社会的責任、ビルマにおける文化的退廃の否定的影響—彼女はその理由の幾分かは1988年の軍事クーデター後の経済の歪みと都市への大量の中国人の移民にあるとしている—に向けられている。彼女は続き物の記事『Amay Shay Sagaa』（母が言い習わしてきたこと）で、伝統的な服装を捨て、大量の飲酒やギャンブルの習慣を身につけ、広告が宣伝する最新の流行を追い求める若者たちのライフスタイルの変化を批判している。

「私たちは誇りをもって私たちの雑誌で定期的にドー・アマーの作品を発表してきました。彼女がよく練られた著作は、ビルマ文化の本質を代表しているからです」と雑誌『Kalaya』の出版社ドー・キャリアは語っている。ドー・アマーはまた、HIV/AIDSなど敏感な問題についての進歩的な公開討論をおこなうよう呼びかけてきた。しかし、「検閲委員会は彼女のAIDSについての記事を印刷して出版することを認めませんでした」とドー・キャリアは残念がった。

それにもかかわらず、ドー・アマーの後期の著作は伝統的な社会的文化的価値の喪失を嘆き、ビルマの女性に対してくりかえしビクトリア朝倫理を説くなど保守的な傾向を帯びるようになった。「私たちは彼女をビルマの偉大な女性として称賛します。しかし、女性の権利のために活動する女性活動家として、彼女の厳格な意見については不満に思うところもあります」亡命先を拠点にしたビルマ女性同盟のリーダーであるマー・シュェ・プイン（Ma Sue Pwint）はそう語っている。抑圧的政権と無慈悲で不正な市場に対するドー・アマーの応答は、全般的に民族主義的(nationalistic)、自民族中心主義的(ethno-centric)、宗教中心主義的(religious-centric)な地平の枠内にあった。伝統的アイデンティティーの再興を呼びかけるなかで、彼女はしばしば多民族社会ビルマのなかで民主的政策を育むために不可欠な市民を基礎にした政治と市民の責任を認識できないことがあった。

しかし、進歩的政治と現代の文化的傾向の文脈だけでドー・アマーの最近の著作を解釈することは、誤読をおかすことになる。60年以上前に初めてペンを執って以来、彼女は衰弱し続ける社会経済状況と絶え間ない政治弾圧という環境のなかでたゆみなく活動してきた。彼女がかつての王都でビルマ独立のシンボルであるマンダレーの歴史と文化の擁護者である。50歳代のベテラン・ジャーナリストであるルードウ・ウー・セイン・ウィンによれば、ドー・アマーは伝統的なビルマ文化のアイデンティティーと尊厳の頑強な擁護者である。不正義と闘い、沈黙への恫喝を拒絶し続けてきたその人生によって、彼女は生ける抵抗のシンボルとなったのである。

「当局に踊らされてはならない」—ルードウ・ドー・アマーへのインタビュー

“Don’t Dance to the Tune of the Authorities” An Interview with Ludu Daw Amar

『The Irrawaddy』の編集助手ミン・ジンは最近、87歳のルードウ・ドー・アマーに、彼女の人生経験や最近のビルマの報道の状況についての見解を尋ねた。彼女はまた、中国人移民、女性の権利、少数民族の権利など社会的政治的な問題についても意見を述べた。以下はその抜粋である。

Q: あなたはジャーナリストとしての人生を選びたかったが、その能力を生かす仕事をするのを許されなかったので、焦点を伝記的作品やその他の記事に向けることになったと述べています。若い人々は今日、あなたを社会批評家あるいは道徳的指導者とみなしています。あなたご自身はご自分のことをいかなる者だと考えていらっしゃいますか？

A: 新聞に記事を書いていたときには、私は社会的政治的な問題に十分な注意を払うことができていました。その後、新聞の廃刊を強制され（1967年）、20年間続けてきた仕事をやめなくてはならなくなりました。今ではもう新聞に書くことはできませんが、それでも特定の社会的問題や報道が目にとまったときにはそれについて書いています。私の報道本能は私の作品のあちこちにその影響を与えています。しかし、私はやはり新聞ジャーナリストであったと主張したいと思います。当時は自由に者を書くことができたのです。

Q: 新聞編集の経験者として、現在のビルマの報道の状況をどのように評価していますか？

A: 状況は次のようなものです。私たちはどのような報道もかつてのようにはすることはできません。報道の自由はありません。報道監視委員会の制限は極めて厳しいものです。つまり、私たちが書きたいように書くことができないのです。そういうわけで、私は罪を問われないもの、民族文化について書くようになったのです。

Q: ビルマでは現在、雑誌出版が急速に広がっていますが、優れたジャーナリズムが長期にわたって育まれる見通しについてはどのようにお考えでしょうか？

A: 見通しはよくありません。ビルマのジャーナリズムの切れ味は鈍くなっています。新しい優れたジャーナリスト集団は、私たちが自由に新聞を発行できるようになったときのみ現れると思います。現在、いかなるジャーナリストも真の新聞ジャーナリストであるとは私は思いません。

Q: あなたは民族間の友情を育む意図をもってタイとアフリカのいくつかの短編小説を翻訳していらっしゃいます。多くの人々は最近のタイとビルマのあいだの激しい論争は、ビルマ政府が発行する新聞の無責任な記者による反タイ王政の記事が原因だと考えています。民族間の友好を促進しようとしてきた作家として、いかがお考えでしょうか？

A: これはジャーナリストの責務に反するものです。それだけでなく、この一群のジャーナリストたちは軍司令官の言いなりになってその命令を唯々諾々と実行しているのです。しかしながら、これが今日のビルマのジャーナリストの唯一の類型なのです。自由に書き、独自の考えや意見を表明しようとするジャーナリストのグループもいます。しかし今日、ジャーナリストたちは自分の意見を自由に書くことができないのです。当局に踊らされない私たちのようなジャーナリストは、広くメッセージを受け取ろうとして私たちが書くもののなかで創造的でなければなりません。それはとても難しいことです。

Q: あなたはある記事のなかで、現在を「Lampang の時代」（裕福な中国人ビジネスマンの時代）と呼んでいます。近年のマンダレーにおける大量の中国人の移民についてどのよう

にお考えでしょうか？

A: 私たちはまるで雲南（省）の一中華人民共和国ではなく一宣言なき植民地にいるように感じています。雲南はまさに私たちの玄関口にあつて、私たちがドアを開けるやいなや、雲南の人々はまるでマンダレーが自分たちの国であるかのようにどっと流れ込んできたのです。

Q: 女性の権利運動は世界中で力をつけています。いくつかの国では、不公正な社会制度の不均衡を是正し、女性を支援しエンパワーするために、アファーマティブ・アクション政策を実施しています。このようなモデルはビルマに適用できるでしょうか？

A: 私たちビルマ女性にはそうしたものはまったくありません。それを目標とすることさえできません。私たちの国には女性の権利どころか、人権そのものがないのです。これが実際の状況です。

Q: あなたは過去にビルマの少数民族についていくつかの記事を書いています。その最近の状況についてどのようにお考えですか？

A: かれらは私たちと平等であるべきです。

Q: 少数民族はビルマが独立を達成して以来、平等を享受してこなかったとお考えですか？

A: そうです。（少数民族とビルマ人が）平等であったことはありませんでした。

Q: あなたの息子たちは皆、政治に参加し、大きな犠牲を払い、自らが信じるところのものを表明するために大きな代償を払ってきました。あなたは彼らの政治への参加をやめさせようとしたことはありますか？あるいは、そうしなかったことを後悔していますか？

A: 後悔はありません。人民はその国の状況が要求するとき、政治に関与するのです。私の子どもたちは若いときに政治に参加しました。かれらがそうすべきだと思ったからです。私たちは独立のために闘わなければならず、半世紀以上も内戦を耐えてきました。こうした状況のなかでは、政治家や政治的活動家をつくりだすことこそ政府に対する回答なのです。人間は人間であり、不正義を知ったとき、それに反対して声をあげるようになります。そして、声をあげたために鞭打たれ、逮捕されることで、かれらは政治家あるいは活動家になるのです。それが、私が目撃してきたことです。同じように、政府はあなた方を若いときに政治的活動家にさせたのではありませんか。ですから、私は子どもたちに関して後悔も満足も感じていませんが、起こるであろうこととしてそれを受け入れてきました。

Q: 個人的な質問ですが、キン・ニユン将軍があなたに誕生日プレゼントとしてボールペンを送ったとか、ドー・アウン・サン・スーチーもあなたに敬意を払ったとか聞いたことがあるのですが、これらの噂は本当ですか？

A: ええ。キン・ニユンは私に敬意を表してお金とかボールペンなどのプレゼントをくれましたよ。数回そうしたことがあったと思います。ドー・アウン・サン・スーチーも使者を送ってきました。

Q: ビルマ中から示されているあなたへの称賛についてどのように思っていますか？

A: とりたてて思うことはありません。

(このインタビューはビルマ語でおこなわれ、それを英語に翻訳した)

■ 訃報

ルードゥ・ドー・アマー

指導的な反体制作家として彼女はビルマの民主化のために闘った

アンナ・アロット

ガーディアン紙 2008年4月12日 (日曜日)

近年、11月29日が近づくと、作家、ジャーナリスト、芸術家はビルマ全土からこの国の文化的中心地であるマンダレーに向かい、ある僧院の敷地内に集まるのが常となっていた。そこでかれらは作家で出版者、活動家であるルードゥ・ドー・アマーの誕生日を祝うのだった。彼女は92歳で亡くなった。イギリスの植民地支配に反対するラングーン大学での学生ストライキに参加した1930年代中期以来、彼女は書くこと、あるいは闘うことを決してやめなかった。

多くの人々にとって、この僧院の敷地に集まるということは、ビルマの軍事政権に対する反対の意思を示す手段であった。あいにくそれは、軍の情報部門が反体制派の名前と顔面を把握する機会でもあった。ネ・ウィン将軍がその後約半世紀にわたってビルマを軍事独裁下に置くことになるクーデターを起こした1962年以降、ドー・アマーはそれに反対し続けてきた。彼女と彼女の家族は大きな代償を払った。

ドー・アマーはタバコの商いで財産を築いた上流階級の家族の12人きょうだいの第四子として生まれた。マンダレーのアメリカン・バプテスト学校と国立高校で教育を受けた後、彼女はマンダレー中等学校とラングーン大学で科学を学んだ。

1936年、ラングーン大学で彼女は学生ストライキに参加した。彼女はまた出版活動も開始した。1938年には、彼女はイギリスの公務員モーリス・コリスの評論『ビルマでの試練』(Trial in Burma)を翻訳した。1939年、彼女はジャーナリストであるウー・ラと結婚した。彼は1933年にラングーンで左派雑誌『Ludu Kyi-bwa-yay』(進歩)を創刊していた。かれらは二人でマンダレーに「Kyi-bwa-yay 出版」を設立した。

1942年、イギリスの支配は崩壊し、ビルマは日本軍の手に落ちた。二人は『Ludu Kyi-bwa-yay』の発行を続けながら、マンダレー北部に移り住んだ。ドー・アマーは火野葦平の好戦的な日本のベストセラー作品『麦と兵隊』を翻訳したが、抵抗運動にも関与するようになった。1945年春までに日本軍はビルマから去り、その年の夏にはウー・ラはドー・アマーを編集助手として雑誌『ルードゥ』(Ludu/人民)の発行を開始し、それは1946年には日刊紙『ルードゥ』(Ludu Thadin-sa)に引き継がれた。1948年にビルマがイギリスからの独立に向かって動き出すと、二人の名前には「ルードゥ」が冠せられるようになった。

しかし独立からまもなくして、二人のラディカリズムに敵愾心をもっていた軍は、出版社を瓦礫の山とした。かれらの家族たちはすんでのところまで逃げ延びた。

1953年、ドー・アマーはソビエトが支援するコペンハーゲンでの平和会議とルーマニアでの青年会議に出席した。他方、彼女の夫はビルマ共産党 (CPB) に鼓舞された学生の抗議行動に関与したとして有罪を宣告され、反乱罪で懲役3年の刑を受けた。ドー・アマーは5人の子どもたちを育てながら、1957年にウー・ラが釈放されるまで『ルードウ』紙の出版を続けた。しかし、その2年後、政府は新聞を14ヶ月間の停刊に処した。

クーデターから5年後の1967年、政府は『ルードウ』紙を廃刊処分にした。ドー・アマーはその著作を政治から文化や歴史に切り替え、戦前のビルマの歌い手や演劇者に焦点を当てるようになった。

軍事政権の登場とともに、ドー・アマーの長男と次男を含む多くの学生たちが学生活動家となった。長男のソー・ウィンは山岳地帯の密林に向かった。1968年、彼はそこで中国の文化大革命の影響を受けたCPB内の粛清で殺害された。次男のタン・ジャウンも学生活動家で、1966年から1972年まで投獄され、1978年に再逮捕される間際で逃れてCPBに参加し、後に雲南に亡命した。このCPBの指導的メンバーは再び母と会うつもりはない。この逃亡劇が起こると、軍の情報部門はウー・ラ、ドー・アマー、かれらの末っ子を13ヶ月間拘禁した。

かれらは1979年に釈放された。ドー・アマーはビルマの私営の月刊誌に書き、政府系の出版物に書くことは拒絶したが、出版社は印刷業でなんとか維持された。目先の利くある女性実業家が彼女の多くの記事を書籍のかたちで出版した。

1982年、ウー・ラは亡くなった。ドー・アマーは出版社の経営を続けたが、1984年の乾季に火事がマンダレー中心部を襲い、「Kyi-bwa-yay出版」の印刷設備、書籍製作室、新聞売り場は灰燼と化した。幸運にも彼女の家、図書室、新聞保管庫は無事だった。

5年後、38歳になった彼女の末っ子が懲役10年の刑を受けた。彼はThayetに投獄されたが、ドー・アマーや彼の妻、その3人の子どもたちがそこに面会に行くためには丸二日間がかかった。

他方、1990年代、政府は観光客のための街の「美化」計画の一部として、墓地をマンダレーのはるか郊外に移転させはじめた。そこでドー・アマーは1998年に、ビルマ経済崩壊のなかで貧しすぎて死者の埋葬もできない人々を支援する相互扶助協会「Byamazo lu-hmuyay Athin」を設立した。当初、マンダレーの軍のトップは憤慨し、この活動を妨害したが、後に「この活動は明らかに必要性があったので」それを認め、他の都市でもこの計画が模倣された。

ドー・アマーは2003年に「Kyi-bwa-yay 出版社」のすぐ裏に小さな建物を建てた。彼女の生涯にわたって集めてきた蔵書がそこに収められた。これはマンダレーで、過去半世紀で初めての誰もが利用できる図書館となる。90歳代になってもドー・アマーは月刊誌に記事を書き、すくなくとも一年に一冊は小さな本を出版した。

私が初めてドー・アマーに会ったのは、1970年代のことだった。仏教的価値を信奉する

伝統的ビルマの代弁者となり、より民主的で人間的な社会、自由に正直に書くことできる社会をめざす闘いによって反政府派の象徴になった彼女に対する私の第一印象—知性、思慮深さ、やさしさ—はその後も変わることはなかった。

私たちは1980年代と1990年代にも会い、最後に会ったのは2005年1月のことだった。彼女の90歳の誕生パーティーへの出席をビルマ政府に妨害されたことは、深い悲しみの源となっている。しかし、私は3年前に会ったときの「私たちは人間として扱われることを願っているだけなのです」という彼女の最後の言葉を思い出す。彼女は二人の息子、二人の娘、6人の孫を残して他界した。

—ルードゥ・ドー・アマー、作家・活動家、1915年11月29日生まれ、
2008年4月7日 死去

■ルードゥ・ドー・アマー —信念と勇気をもったビルマ人文筆家

2008年7月4日

Myint Zan

ドー・アマー

1915年11月29日、ビルマ・マンダレー生まれ

2008年4月7日、ビルマ・マンダレーで死去

人々に尊敬されていた優れたビルマ人作家ルードゥ（「人民」）・ドー・アマーがビルマのマンダレーで92歳で亡くなった。彼女はその生涯の歩みによって国中の人々から尊敬されていた。ドー・アマーはその著作によってだけでなく、文学、政治、文化に関する、彼女が人民のものであるべきと信じる立場からする勇気ある発言によって、人々から愛され、尊敬された。

ドー・アマー（「ドー」(Daw) はビルマ人女性につける敬称で、およそ英語の「Ms」に該当する）は、とても若くしてビルマの文学界、そして政治のシーンにその名前を刻んだ。ラングーン大学で学んでいるとき、彼女は1936年2月の第二次学生ストライキとして知られる大学当局およびイギリス植民当局に対するストライキを牽引した学生リーダーの一人となった。ストライキの二年後の1938年、彼女は最初の著作となるモーリス・コリスの『ビルマでの試練』(Trials in Burma) の翻訳を出版した。彼女は大学時代にマウン（「若者」(lad) を意味する敬称）—後のウー・ラ（「ミスター・ハンサムの意」）という名の一人のジャーナリストと出会った。かれらは1939年に結婚し、そのすぐ後にウー・ラは、ビルマの文化的首都でドー・アマーの故郷であるマンダレーに移った。二人は戦争時および、さまざまな理由で投獄されていた時期を除き、ルードゥ・ウー・ラが1982年に亡くなるまで

の約40年間、マンダレーで生活し働いた。

1950年代初期からラとアマーの二人は、ルードゥ（人民）という敬称をつけて知られるようになった。それは、ウー・ラとドー・アマーが終戦直後の1945年に共同で創刊した雑誌—後に独立した日刊紙になる—の名前に由来する。ルードゥ（Ludu）は英語で「The people」と訳されているが、ビルマ語では通常このthe peopleの訳語には、「その国の市民」（citizens of the country）を意味する「Pyithu」が当てられている。Luduというのは、「人民大衆」（masses of people）とでも訳することができる、より口語的で、ある意味でより戦闘的な用語である。1946年、二人は国内外の諸事件に関して左翼的な論陣をはるルードゥ・デイリー・ニューズペーパーを創刊した。それは、1967年7月に当時の革命政府によって永久に廃刊にされるまで、マンダレーで最初の—そして後には唯一の—民営の新聞であった。

ルードゥ・ドー・アマーは、あまりにも大きな困難を勇気と忍耐をもって耐え抜いてきた。1950年代には、夫のウー・ラが扇動罪で三年の懲役刑に処せられた。この期間、彼女は育ち盛りの子どもたちの面倒をみつつ、ルードゥ紙を経営した。



ルードゥ夫妻の確固たる左翼的見解は、少なくとも二人の子どもたちには、よりラディカルな方法で引き継がれたようだ。ドー・アマーの長男ソー・ウィンはラングーン大学の学生時代の1963年に「地下に潜り」、共産主義者たちと合流した（ビルマ共産党—CPB—は1939年に結成された。ビルマ独立直後、CPBは地下に潜行し、1948年3月に非合法化され、現在に至っている）。悲しいことに、CPBの司令部があったペグ山での「内部粛清」で、1968年にソー・ウィンは殺害された。ドー・アマーの次男ポー・タン・ジャウン（「鉄の仲間」）

は、1966年から1972年まで約6年間（無実の罪で裁判もないまま）投獄された。1976年8月、再逮捕されるすれすれのところで、ポー・タン・ジャウンはなんとか逃げ延び、CPBに合流した。母と息子はその後会うことはなかった。ポー・タン・ジャウンと接触した嫌疑で、ルードウ夫妻は投獄され、ドー・アマーについては「彼女が私に語ったところでは」1978年から1979年にかけて「一年と一ヶ月、一日」投獄された。彼女の末っ子ニェイン・チャン（作家のニー・プー・レー）は、父と同様に扇動罪で有罪を宣告された。ニェイン・チャンは亡くなった彼の父が1950年代に投獄されたときよりも権威主義的な政権の下、より過酷な条件のなかで、父の二倍以上の日々を監獄で過ごした。

ルードウ紙には夫妻のそれぞれのコラムがあった。「（私が）書きたいことの寄せ集め」（Motley of things that [I] want to write about）と題されたウー・ラのコラムは、内容とトーンの双方で「揺れ動く世界の諸事件についての論評」（Comments on the Moving World Events）と題するドー・アマーのコラムよりもイデオロギー色が少なく、ソフトだった。1960年代中期、ルードウ紙の論説、とりわけドー・アマーのコラムはジョンソン政権のベトナム政策を弾劾し続けた。ドー・アマーは同国人で当時の国連事務総長であったウ・タントに対しても「容赦」せず、ベトナム紛争の解決に向けた取り組みにおけるウ・タントの「偏向」（もちろんアメリカ寄りの）を非難した。

文筆家としてのドー・アマーの貢献は、政治問題にとどまることはなかった。1964年、彼女は主にビルマの文化的中心地マンダレー出身のビルマの歌手や芸術家について入念で有益な研究である著作『人民に愛された芸術家たち』（Artists Loved by the People）で国内の文学賞を受賞した。1967年7月にルードウ紙が廃刊に追い込まれた後、彼女の著作の方向性は、それ以前の政治問題に集中したものからビルマ文化に関する話題に、そして彼女が70歳代、80歳代になってからは社会問題へと移行した。彼女は1964年以後も引き続いてビルマ文化のさまざまな側面についての著作を出版し、多くの重要な貢献をおこなったが、政府エリートが授与する国内の文学賞を二度と受賞することはなかった。彼女自身を含めて彼女の家族のほとんどの政治的見解や立場が当局に受け入れられなかったという事実は別にしても、その第一の理由は、（少なくとも当時は）不自然で、（ある意味で）エリート的な文語的あるいは公式的な文体よりも、親しみやすい「口語体」を用いるという、1967年ごろに物を書き始めて以来の彼女の信念にもとづく立場によるものだった。

過去四半世紀、彼女が亡くなる直前まで、国中から数百人の人々が、ドー・アマーを讃えるために、毎年11月29日にマンダレー近くの僧院に集まった（彼女の最後の92歳の誕生日祝いは、彼女の娘の家でおこなわれた。当局が公共の場所での彼女の誕生日を祝うことを許可しなかったので、個人の家で行われることになったのだった）。ドー・アマーは晩年には愛情と敬意をこめて単に「アメイ」（お母さん）と呼ばれるようになった。おそらく時には、そして少なくとも何人かからは、ほめすぎと思われる言葉を受けたが、彼女はいつも控えめで穏やかだった。私は10年前に、おそらくは作り話だが、当時の国家法秩序回復評議会の委員の一人が彼女の誕生日祝いに高価なペンを（直接ではなく代理人を通して）渡したが、彼女はそれを投げ捨てたという、という話を聞いたことがある。2004年

初めに約15年ぶりにドー・アマーに会ったとき、この件について彼女に尋ねた。彼女は気取らず穏やかに、それは真実ではなく、「そうしようとは思わなかった」と語った。しかし、彼女は亡くなる数週間前に至るまで、印刷メディア（彼女は90歳になっても口述で文章を発表し続けた）や外国のラジオ局とのインタビューを通して、様々な問題についての自分の考えをつねに語り続けた。

アメイ・ドー・アマーは長生きをしたので、その長く生産的で人を鼓舞する人生のおかげで、多くの友人、同代人、時には（おそらくは）自分より若い仲間に先立たれた。その全生涯を通して、彼女は先輩者、国際的人物を含む同代人、そして自分よりも若い人々に対する様々な追悼文を書いている。彼女が追悼文を書いた国際的人物には、バーナード・ラッセル（1872-1970）やイタロ・カルヴィーノ（1923-1985）がいる。2003年ごろ、彼女の友人や同僚たちは彼女の追悼文を集め、「（旅立っていった）人々の思い出についてのエッセイ」とでも訳せる題をつけて出版した。

ビルマ人現代詩人ティン・モウ（1933-2007）が2007年1月22日に亡命先のロサンゼルスで亡くなったとき、ドー・アマーはボイス・オブ・アメリカおよびイギリス放送協会（BBC）とのインタビューで、（彼女の表現によれば）「無用な老女」である自分は死んでいないのに、ティン・モウは（彼女によれば「全盛期」であったのに）73歳で死ななければならなかった、と嘆き悲しんだ。彼女はもはや書くことができなくなったので自分は「無用」になったとほめかした。（しかし実際には、亡くなる数年前まで彼女は娘への口述という形で「書き」続けた。それがいくぶん困難になるのは亡くなる数ヶ月前のことだった）。

しかし、アメイ・ドー・アマーが自分は「無用な老女」になったと言うのは、自分を卑下しすぎることであったろう。尊敬されるべき年齢ではあっても、「無用」では決してなかった、と私たちははっきりと言うことができる。実際、彼女の人生は残された私たちを大きく鼓舞するものであったし、彼女を失ってわたしたちは本当に寂しく思う。

ドー・アマーがその文学的政治的キャリアをスタートさせた70年以上前の1936年2月のラングーン大学での学生ストライキの頃だと思われるが、後にMinthuwn（1909-2004）という名で知られるようになるもう一人のすぐれたビルマ人文学者が、彼女に手書きの詩を送っている。私の翻訳ではそれは次のようなものだ（この詩は堅固さを意味する彼女の名前「アマー」をその原点として、また忠告として使っている）。

曲がった道は「まっすぐな」道ではない
 無気力は堅固さではない
 不正が正しさにまさるようにさせてはならない
 堅固さを無気力にさせてはならない

アメイ・ドー・アマーの生涯は、彼女がその名の通りの堅固さをもって生きてきたことを示して余りある。実際、優しさにあふれ確信に満ちたその生涯は、その死を悼むすべ

ての人々を励まし、その勇気の源となってきたのだ。

ミン・ザン Dr. Myint Zan

マラッカ・マルティメディア大学法学部教授

マレーシア

(以上3編 翻訳：池田高巖)

■ビルマ

ダウ・アマー夫人(ジャーナリスト)

コペンハーゲン世界女性大会(1953年6月)の発言より

出典 世界婦人大会代表報告会中央準備会編『平和と幸福のために—世界婦人大会報告・決議集』(五月書房、1954年)

ビルマでは、女は、農業労働者や、軽工業労働者や、苦力や、家内労働者や、手工業労働者や、売子や、行商人として、やとわれています。女性で、技師や裁判官や役人になっているものは、一人もありません。

女はひじょうに低い賃金しかもらえません。労働省でつくった統計によりますと、八百の工業企業にいる婦人労働者のうち、その二割一分は、五十ルピー以下の月給しかもらっておらず、五割一分が、五十ルピーから八十ルピーのあいだの給料をもらっている状態です。ラングーンのあるゴム工場では、女たちは、一日わずか一ルピーから一ルピー半の賃金しかとっていません。これは、男子労働者の平均賃金の半分です。農村では、この状態はもっと悪くなります。農村の中流家庭では、二頭の牛馬、いいかえれば約十エーカーを耕すだけの牛馬しかもって、生きてゆくに十分な作物をつくることもできません。

豊かな階級にぞくする女たちも、同じように、独立した生活をするにはできませんし、役人の妻には、じぶんの国の政治生活、公共生活に参加することがゆるされておられません。若い娘たちが、奴隷として売り買いされるといふ例も、まだのこっています。妻には、離婚する権利がありながら、離婚しようとおもう女はごくまれです。男には多くの妻をもつ権利があり、この妻たちは、虐待されたとか棄てられたとかしなければ、たいいていのばあい自由をとりもどすということはありません。

全国で、人口は一千七百万にのぼりますが、それにたいして、一九五二年末には、国家の補助による母子施療所は百八、公共の産院は一つ、母子病院は二つ、附属療養所は一つしかありません。

一九五二—五三年度予算では、四億八千六百九十万ルピー、すなわち、国の全資金の七割が軍事目的にわりあてられています。

軍備や、いわゆる国防なるものに、これほど巨額の資金をついやしながら、ビルマ政府は、国境周辺の国民党の侵略者たちをおいはらうこともできなかったのです。

アメリカ政府は、日本に六百の軍事基地をもち、台湾を航空母艦として利用するだけで

は足りないで、今日では、新中国を破壊し、アジア全土を戦争陣営にだきこもうという目的で、ビルマを軍事基地化しようとたくらんでいます。

現在、ビルマの婦人たちは、民族独立のための国民全体のたたかいをおこないながら、同時に、じぶんたちの権利のためにもたたかわなければならないということを理解しています。また、世界中で、平和のために力強いたたかいがおこなわれているということも、ビルマの女性は知りました。いまビルマの女は、平和と、独立と、婦人の権利をまもるためのじぶんたちの闘争が勝利をおさめるように、統一のためにねばり強い、断固とした努力をはらっています。